筑波大学体育専門学群生のドーピング意識調査結果（2008年度）

近藤良享・長谷川悦示

Report on the present state of students' anti-doping views in Undergraduate School of Health and Physical Education, University of Tsukuba (2008)

KONDO Yoshitaka, HASEGAWA Etsushi

Ⅰ．はじめに

アンチ・ドーピングが声高に叫ばれる中、国際的にも国内的にも日本のスポーツ界、大学スポーツ界をリードする筑波大学体育専門学群の学生たちが、ドーピングに対してどのような意識、考え方、現状であるかについて把握することは、大学機関・関係者として不可欠である。そのため本学体育専門学群生に対して、2004年度に初めて「ドーピング意識調査」を実施し、前回が2006年度、そして今回2008年度に第3回目を実施した。

この調査は、筑波大学体育専門学群生のドーピング意識についての現状把握を行うと共に、調査そのものへの回答を通じて、本学群生のアンチ・ドーピングに対する意識向上を図ることを目的にしている。また、結果分析にあたっては、前回の2004年、2006年に実施した2回の意識調査結果とも比較検討し、今後の体育専門学群におけるアンチ・ドーピングへの取り組みについての基礎資料を得ることにした。

Ⅱ．調査方法

1．調査内容

「アンチ・ドーピングに対する意識調査」の質問は、所属競技団体名、性別、.学年、競技レベルといった基礎項目に続き、ドーピングへの関心の度合い（以下、関心の度合い）、当該競技種目における禁止薬物が使用される可能性（以下、薬物使用の可能性）、.ドーピングに対する信条（以下、ドーピング観）、ドーピング検査の方針や手順についての情報（以下、ドーピングの情報）、サプリメント摂取とドーピング違反の可能性（以下、サプリメントとドーピング）、ドーピング検査回数についてという10の質問は、2004年、2006年と同様であるが、今回は、「あなたは、高校時代において、どのような形でアンチ・ドーピングについての教育、情報提供を受けましたか。（複数選択可）」を新たに加えて情報源を特定しようとした。

調査項目・内容は以下のとおりである。

Q1 あなたが活動する競技名は？

Q2 あなたの性別は。(1) 男性　(2) 女性

Q3 あなたの学年は。(1) 1年生 (2) 2年生　(3) 3年生　(4) 4年生

Q4 あなたの競技レベルについて伺います。現在までにあなたが出場した最も高いレベルの大会はどれですか。(1) オリンピック・世界選手権レベル　(2) 全国大会レベル　(3) 都道府県大会レベル　(4) 市町村大会レベル　(5) その他（レクリエーション等）

Q5 ドーピング禁止薬物使用問題について、どのくらい関心がありますか。(1) 非常に関心がある　(2) かなり関心がある　(3) 少し関心がある　(4) まったく関心がない

Q6 国際的に見て、あなたの競技種目で競技力向上のために薬物（ドーピング禁止薬物）が使用される可能性はどのくらいあると思いますか。(1) 使用される可能性は非常に高いと思う　(2) 使用される可能性は高いと思う　(3) 使用

筑波大学大学院人間総合科学研究科（体育科学系）

される可能性はわからない (4) 使用される可能性は低いと思う (5)使用される可能性はないと思う

Q7 競技力向上のための薬物(ドーピング禁止薬物)使用について、あなた自身の考えや気持ちを表現するものとして、以下のどの信条が最も適切だと思いますか。(1) いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用は間違っていると思う (2) 状況次第で、競技力向上の薬物使用を判断すべきだと思う (3) いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用はかまわないと思う

Q8 あなたはドーピング検査の方針や手順についてどのくらい情報を得ていますか。(1) まったくなし (2) 少しある (3) ある程度、得ている (4) 相当に得ている (5) 十分に得ている

Q9 あなたは栄養食品・エネルギー補助食品(サプリメント)の摂取がどのくらいドーピング検査の陽性(ドーピング違反)に結びつく可能性があると思いますか。(1) 可能性は大きい (2) ある程度の可能性がある (3) 可能性は小さい (4) 可能性はまったくない (5) わからない

Q10 あなたが、2006年4月1日～2008年3月31日の2年間に受けたドーピング検査の回数は何回ですか。

Q11 あなたは、高校時代において、どのような形で、アンチ・ドーピングについての教育、情報を得ましたか。(複数選択可) (1) 保健体育授業 (2) 運動部活動 (3) 競技、協会関係のセミナー (4) 新聞、テレビ、雑誌など

2．調査手順および回答結果

調査は以下の手順で実施した。1年生は2008年4月9日の新入生オリエンテーションの時間、2、3、4年生は2008年4月10日の学年別ガイダンスにおいて、調査目的を説明した後、調査用紙を配布し、その場での回答もしくは後日の提出を指示した。後日の調査用紙の回収期間は2008年4月12日から同4月18日までとした。

回答数について、1年生は在籍数247名のうち244名が回答し、回答率は98.8%であった。2年生は在籍数250名のうち187名が回答し、回答率は74.8%であった。3年生は在籍数247名うち186名が回答し、回答率は74.8%であった。4年生は在籍数294名のうち181名が回答し、回答率は61.6%であった。体育専門学群全体では、在籍者数1038名のうち798名が回答し、回答率は76.9%であった。

3．データ分析手順

得られたデータの入力および統計処理は、プライバシーへの配慮から業者に委託して、入力の段階から個人が特定されないようにした。

Ⅲ．2008年度の調査結果(表1-5および表6-1, 2, 3, 4参照)

(1) 所属競技団体数と回答者数:回答者が所属する競技団体数は29競技団体で、回答者総数は798名だった。

(2) 性別:798名のうち、男子学生が563名(70.6%)で、女子学生が235名(29.4%)であった。

(3) 学年区分:1年生が244名(30.6%)、2学年が187名(23.4%)、3学年が186名(23.3%)、4学年が181名(22.7%)であった。

(4) 競技レベル:オリンピック・世界選手権レベルが39名(6.0%)、全国大会レベルが457名(53.9%)、都道府県レベルが302名(34.1%)であった。なお、市町村レベルおよびその他は、都道府県レベルに参入した。

(5) 関心の度合い:「非常に関心がある」は、109名(13.7%)、「かなり関心がある」は、222名(27.9%)、「少し関心がある」は、430名(54.0%)、「まったく関心がない」は36名(4.5%)、「無回答」が1名であった。

(6) 薬物使用の可能性:国際的な視野からのドーピングの可能性について、「使用される可能性は非常に高い」は、165名(20.8%)、「使用される可能性は高い」は、274名(34.5%)であり、また、「使用される可能性はわからない」は、190名(23.9%)、「使用される可能性は低い」は、150名(18.9%)、「使用される可能性はない」は、16名(2.0%)、「無回答」が3名であった。

(7) ドーピング観:ドーピングについての信条として、「いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用は間違っていると思う」と回答したのは、637名(80.0%)、「状況次第で、競技力向上の薬物使用を判断すべきだと思う」は、147名(18.5%)、「いかなる状況下でも、競技力向上の薬物使用はかまわないと思う」は、12名

（1.5%）、「無回答」は、2名であった。

(8) ドーピングの情報：検査の方針、手順といったドーピング情報に関して、「まったくなし」は、90名（11.3%）、「少しある」は、368名（46.3%）、「ある程度、得ている」は、269名（33.9%）、「相当に得ている」は、46名（5.8%）、「十分に得ている」は、21名（2.6%）、「無回答」は、4名であった。

(9) サプリメントとドーピング：補助食品・サプリメントの使用によってドーピング検査で陽性となる可能性について、「可能性は大きい」と回答したのは、100名（12.6%）、「ある程度の可能性がある」は、443名（55.7%）、「可能性は小さい」は、171名（21.5%）、「可能性はまったくない」は、22名（2.8%）、「わからない」は、59名（7.4%）、「無回答」は、3名であった。

(10) ドーピングの検査有無：2006年4月1日～2008年3月31日の2年間に受けたドーピング検査の有無について、「ある」と回答したのは、40名（5.0%）、「ない」が758名（95.0%）であった。検査を受けた回数は、1回が26名で最も多く、以下、2回が5名、3回が4名と続き、最高検査回数として9回と回答した学生が1名いた。また、個人種目が35名で団体種目が5名であった。

(11) 高校時代のアンチ・ドーピング教育、情報：複数選択ができる中で、「保健体育の授業」を選択したのは、492名（61.7%）、「運動部活動」は、179名（22.4%）、「競技・協会関係セミナー」は、175名（21.9%）、「新聞・テレビ・雑誌など」は、378名（47.4%）であった。

Ⅳ．2008年度の特徴と今後の課題

2008年度の筑波大学体育専門学群生への「ア

表1 「関心の度合い」についての回答

Q1. 関心の度合い	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	インターハイ・全国選手権	全国レベル	都道府県
非常に関心	13.7%	12.8%	15.7%	15.2%	12.8%	12.4%	13.9%	**17.2%**	10.8%	13.3%	16.3%	15.0%
	(109)	(72)	(37)	(37)	(24)	(23)	(25)	(52)	(49)	(6)	(65)	(38)
かなり関心	27.9%	28.3%	26.8%	28.3%	31.0%	24.7%	27.2%	**33.7%**	24.6%	22.2%	33.0%	31.5%
	(222)	(159)	(63)	(69)	(58)	(46)	(49)	(102)	(112)	(10)	(132)	(80)
すこし関心	54.0%	53.2%	55.7%	52.5%	53.5%	58.1%	52.2%	45.9%	**59.3%**	48.9%	61.0%	64.6%
	(430)	(299)	(131)	(128)	(100)	(108)	(94)	(139)	(270)	(22)	(244)	(164)
全くない	4.5%	5.7%	1.7%	4.1%	2.7%	4.8%	6.7%	3.3%	5.3%	2.2%	3.8%	7.9%
	(36)	(32)	(4)	(10)	(5)	(9)	(12)	(10)	(24)	(1)	(15)	(20)
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	87%	114%	119%
合計	(797)	(562)	(235)	(244)	(187)	(186)	(180)	(303)	(455)	(45)	(400)	(254)
		χ^2値	7.22 ns		χ^2値	6.27 ns		χ^2値	18.55 p<.001	χ^2値	5.81 ns	

表2 「薬物使用の可能性」についての回答

Q2. 薬物使用の可能性	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	インターハイ・全国選手権	全国レベル	都道府県
非常に高い	20.8%	22.3%	17.0%	16.5%	19.4%	21.0%	27.8%	**32.2%**	12.4%	12.8%	21.3%	21.0%
	(165)	(125)	(40)	(40)	(36)	(39)	(50)	(98)	(56)	(5)	(87)	(63)
高い	34.5%	35.7%	31.5%	34.2%	34.9%	36.0%	32.8%	28.9%	**38.0%**	28.2%	32.9%	37.7%
	(274)	(200)	(74)	(83)	(65)	(67)	(59)	(88)	(172)	(11)	(150)	(113)
低い	18.9%	17.7%	21.7%	19.3%	15.6%	20.4%	20.0%	16.8%	20.1%	25.6%	19.3%	17.3%
	(150)	(99)	(51)	(47)	(29)	(38)	(36)	(51)	(91)	(10)	(88)	(52)
非常に低い	2.0%	2.1%	1.7%	3.3%	1.6%	2.2%	0.6%	2.0%	2.2%	2.6%	2.6%	1.0%
	(16)	(12)	(4)	(8)	(3)	(4)	(1)	(6)	(10)	(1)	(12)	(3)
わからない	23.9%	22.1%	28.1%	26.7%	28.5%	20.4%	18.9%	20.1%	**27.4%**	30.8%	23.9%	23.0%
	(190)	(124)	(66)	(65)	(53)	(38)	(34)	(61)	(124)	(12)	(109)	(69)
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
合計	(795)	(560)	(235)	(243)	(186)	(186)	(180)	(304)	(453)	(39)	(456)	(300)
		χ^2値	7.12 ns		χ^2値	17.76 ns		χ^2値	44.72 p<.001	χ^2値	7.61 ns	

表3 「ドーピング観」についての回答

Q3. ドーピング観	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	インターハイ・全国選手権	全国レベル	都道府県
無条件で使用は悪い	80.0%	80.0%	80.0%	**86.5%**	73.1%	79.6%	78.9%	**84.2%**	78.1%	79.5%	81.4%	78.0%
	(637)	(449)	(188)	(211)	(136)	(148)	(142)	(256)	(354)	(31)	(372)	(234)
状況次第で判断すべき	18.5%	17.8%	20.0%	13.1%	**25.3%**	19.4%	17.8%	15.8%	19.9%	20.5%	17.7%	19.3%
	(147)	(100)	(47)	(32)	(47)	(36)	(32)	(48)	(90)	(8)	(81)	(58)
無条件でかまわない	1.5%	2.1%	0.0%	0.4%	1.6%	1.1%	**3.3%**	0.0%	**2.0%**	0.0%	0.9%	2.7%
	(12)	(12)	(0)	(1)	(3)	(2)	(6)	(0)	(9)	(0)	(4)	(8)
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
合計	(796)	(561)	(235)	(244)	(186)	(186)	(180)	(304)	(453)	(39)	(457)	(300)
		χ^2値	5.46 ns		χ^2値	17.16 p<.01		χ^2値	8.53 p<.05	χ^2値	5.06 ns	

表4 「ドーピングの情報」についての回答

04. ドーピングの情報	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	オリンピック・世界選手権	全国レベル	都道府県
十分に得ている	2.6%	2.1%	3.8%	2.0%	2.2%	**5.4%**	1.1%	**5.0%**	0.9%	5.3%	3.5%	1.0%
	(21)	(12)	(9)	(5)	(4)	(10)	(2)	(15)	(4)	(2)	(16)	(3)
相当得ている	5.8%	5.2%	7.2%	3.7%	4.9%	6.5%	**8.9%**	**8.6%**	4.4%	**13.2%**	6.6%	3.7%
	(46)	(29)	(17)	(9)	(9)	(12)	(16)	(26)	(20)	(5)	(30)	(11)
ある程度得ている	33.9%	32.2%	37.9%	21.7%	37.3%	39.5%	**41.1%**	**40.6%**	29.9%	**50.0%**	36.3%	28.1%
	(269)	(180)	(89)	(53)	(69)	(73)	(74)	(123)	(135)	(19)	(166)	(84)
少しある	46.3%	48.1%	42.1%	**51.6%**	49.7%	38.4%	43.9%	39.6%	**50.7%**	26.3%	45.7%	49.8%
	(368)	(269)	(99)	(126)	(92)	(71)	(79)	(120)	(229)	(10)	(209)	(149)
全くない	11.3%	12.3%	8.9%	**20.9%**	5.9%	10.3%	5.0%	6.3%	**14.2%**	5.3%	7.9%	**17.4%**
	(90)	(69)	(21)	(51)	(11)	(19)	(9)	(19)	(64)	(2)	(36)	(52)
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
合計	(794)	(559)	(235)	(244)	(185)	(185)	(180)	(303)	(452)	(38)	(457)	(299)
		χ^2値	7.52 ns		χ^2値	64.16 p<.001		χ^2値	38.23 p<.001	χ^2値	38.15 p<.001	

表5 「サプリメントのドーピングの可能性」についての回答

05. サプリメントのドーピングの可能性	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	オリンピック・世界選手権	全国レベル	都道府県
可能性は大きい	12.6%	11.8%	14.5%	9.1%	12.9%	14.0%	15.6%	15.1%	11.1%	5.1%	12.5%	13.7%
	(100)	(66)	(34)	(22)	(24)	(26)	(28)	(46)	(50)	(2)	(57)	(41)
ある程度の可能性がある	55.7%	55.2%	57.0%	50.2%	57.5%	**62.4%**	54.4%	53.6%	57.1%	56.4%	**58.9%**	50.8%
	(443)	(309)	(134)	(122)	(107)	(116)	(98)	(163)	(258)	(22)	(269)	(152)
可能性は小さい	21.5%	22.0%	20.4%	23.9%	22.6%	16.7%	22.2%	21.4%	21.5%	30.8%	19.7%	23.1%
	(171)	(123)	(48)	(58)	(42)	(31)	(40)	(65)	(97)	(12)	(90)	(69)
可能性は全くない	2.8%	3.0%	2.1%	3.3%	3.2%	1.6%	2.8%	3.3%	2.7%	**7.7%**	2.8%	2.0%
	(22)	(17)	(5)	(8)	(6)	(3)	(5)	(10)	(12)	(3)	(13)	(6)
わからない	7.4%	8.0%	6.0%	**13.6%**	3.8%	5.4%	5.0%	6.6%	7.7%	0.0%	6.1%	**10.4%**
	(59)	(45)	(14)	(33)	(7)	(10)	(9)	(20)	(35)	(0)	(28)	(31)
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
合計	(795)	(560)	(235)	(243)	(186)	(186)	(180)	(304)	(452)	(39)	(457)	(299)
		χ^2値	2.69 ns		χ^2値	29.26 p<.01		χ^2値	3.35 ns	χ^2値	18.20 p<.05	

表6-1 「高校時の保健体育の授業からの情報」についての回答

06-1. 高校時の保健体育の授業からの情報	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	オリンピック・世界選手権	全国レベル	都道府県
情報あり	61.7%	63.1%	58.3%	**68.4%**	61.5%	**69.9%**	44.2%	51.3%	**68.6%**	56.4%	55.4%	**71.9%**
	(492)	(355)	(137)	(167)	(115)	(130)	(80)	(156)	(312)	(22)	(253)	(217)
情報なし	38.3%	36.9%	41.7%	31.6%	38.5%	30.1%	**55.8%**	**48.7%**	31.4%	43.6%	**44.6%**	28.1%
	(306)	(208)	(98)	(77)	(72)	(56)	(101)	(148)	(143)	(17)	(204)	(85)
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
合計	(798)	(563)	(235)	(244)	(187)	(186)	(181)	(304)	(455)	(39)	(457)	(302)
		χ^2値	1.59 ns		χ^2値	33.42 p<.001		χ^2値	22.95 p<.001	χ^2値	21.40 p<.001	

表6-2 「高校時の運動部活動での情報」についての回答

06-2. 高校時の運動部活動での情報	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	オリンピック・世界選手権	全国レベル	都道府県
情報あり	22.4%	21.7%	24.3%	24.6%	19.8%	22.0%	22.7%	**34.2%**	15.6%	**41.0%**	**30.6%**	7.6%
	(179)	(122)	(57)	(60)	(37)	(41)	(41)	(104)	(71)	(16)	(140)	(23)
情報なし	77.6%	78.3%	75.7%	75.4%	80.2%	78.0%	77.3%	65.8%	**84.4%**	59.0%	69.4%	**92.4%**
	(619)	(441)	(178)	(184)	(150)	(145)	(140)	(200)	(384)	(23)	(317)	(279)
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
合計	(798)	(563)	(235)	(244)	(187)	(186)	(181)	(304)	(455)	(39)	(457)	(302)
		χ^2値	0.34 ns		χ^2値	1.43 p<.01		χ^2値	35.56 p<.001	χ^2値	63.52 p<.001	

表6-3 「高校時の競技、協会関係のセミナーからの情報」についての回答

06-3. 高校時の競技、協会関係のセミナーからの情報	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	オリンピック・世界選手権	全国レベル	都道府県
情報あり	21.9%	19.4%	**28.1%**	22.5%	20.9%	22.0%	22.1%	**38.8%**	11.4%	**59.0%**	**28.7%**	7.0%
	(175)	(109)	(66)	(55)	(39)	(41)	(40)	(118)	(52)	(23)	(131)	(21)
情報なし	78.1%	**80.6%**	71.9%	77.5%	79.1%	78.0%	77.9%	61.2%	**88.6%**	41.0%	71.3%	**93.0%**
	(623)	(454)	(169)	(189)	(148)	(145)	(141)	(186)	(403)	(16)	(326)	(281)
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
合計	(798)	(563)	(235)	(244)	(187)	(186)	(181)	(304)	(455)	(39)	(457)	(302)
		χ^2値	7.37 p<.01		χ^2値	0.18 ns		χ^2値	78.64 p<.001	χ^2値	82.93 p<.001	

表6-4 「高校時の新聞・テレビ・雑誌などからの情報」についての回答

06-4. 高校時の新聞・テレビ・雑誌などからの情報	全体	性別		学年				競技種目		競技レベル		
		男	女	1年	2年	3年	4年	個人種目	団体種目	オリンピック・世界選手権	全国レベル	都道府県
情報あり	47.4%	48.7%	44.3%	46.7%	46.0%	43.5%	53.6%	42.8%	49.7%	28.2%	42.9%	**56.6%**
	(378)	(274)	(104)	(114)	(86)	(81)	(97)	(130)	(226)	(11)	(196)	(171)
情報なし	52.6%	51.3%	55.7%	53.3%	54.0%	56.5%	46.4%	57.2%	50.3%	**71.8%**	**57.1%**	43.4%
	(420)	(289)	(131)	(130)	(101)	(105)	(84)	(174)	(229)	(28)	(261)	(131)
	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
合計	(798)	(563)	(235)	(244)	(187)	(186)	(181)	(304)	(455)	(39)	(457)	(302)
		χ^2値	1.30 ns		χ^2値	4.08 ns		χ^2値	3.49 ns	χ^2値	19.80 p<.001	

ンチ・ドーピング意識調査」から、幾つかの特徴および今後の課題をあげると次のようになる。

1．調査結果に見られる特徴

表1の「関心の度合い」について、2008年度も、2004年度、2006年度と同じ特徴が見られる。すなわち、過去の2回と同様、競技種目（個人種目と団体種目）別のうち、「非常に関心がある」が、団体種目よりも個人種目の方が強い関心を示している点である。（年度:個人種目、団体種目）2004年度：12.0%、5.2%、2006年度：13.3%、8.5%、2008年度：17.2%、10.8%である。過去2回の調査と比較すると、経年的に漸進的な関心度の高まりがあるとは言え、毎回、個人種目と団体種目では数ポイントの違いが認められる。

表3の「ドーピング観」について、学年別集計の中で、1年生は、「無条件で使用は悪い」と86.5%が回答し、学年があがるほど、「状況次第で判断すべき」との回答が増えていく。この傾向は過去の2004年度、2006年度の調査とも同様であるが、これはドーピング問題にも多種多様で、境界線上の事例が存在し、すべての事例を一括して価値判断できない状況を示していると考えられる。

表4の「ドーピングの情報」について、学年別集計の「全くない」と回答した1学年が2割以上もおり、他の学年の4倍近くを示している。この傾向は、過去2回とも同様である（年度：1年、2年、3年、4年；2004年度：29.0%、10.3%、15.8%、11.1%、2006年度：20.1%、7.7%、11.5%、9.5%、2008年度：20.9%、5.9%、10.3%、5.0%）。入学当初の1学年は、ドーピングについての情報、「全くない」20.9%、「少しある」51.6%という不足状況の回答に対して、2学年以上になると、「ある程度得ている」、「相当に得ている」と回答している学生が確実に増加している。4年次の回答の「ある程度得ている」は41.1%を示している。十分な情報提供、獲得しているかは別として、在学中のドーピング関連情報が、学年次を追って提供、獲得されていることがわかる。

また、個人種目と集団種目の結果から、前回、前々回と同様に、個人種目の方が集団種目よりもドーピングに関する情報が多く伝えられていた。2008年度に限れば、その差が拡大している点が注目される。すなわち、「ある程度得ている」、「相当得ている」、「十分に得ている」を合計した場合、個人種目は54.2%であるが、集団種目は35.2%に留まっている。この個人種目と団体種目の20ポイント近くの差については、団体種目関係者のドーピング防止教育、啓蒙への取り組みが十分ではないことに起因していると推測される。

表5の「サプリメントのドーピングの可能性」について、他の学年に比べて、1学年がサプリメントに禁止薬物を含有する「可能性が大きい」と回答する学生が少ない点や、「わからない」の回答者数の多さ（2008年度の学年：1年、2年、3年、4年；13.6%、3.8%、5.4%、5.0%）は問題点としてあげられよう。サプリメントの中には禁止物質が含まれたものあるという事実について、高校時代の教育・啓蒙はもとより、大学入学早々の1年生次に対する正しい情報提供、例えば新入生オリエンテーションの場での啓蒙などの対策が必要であろう。

2008年度には、新たに「高校時代において、どのような形で、アンチ・ドーピングについての教育、情報を得ましたか（複数選択可）」という設問を追加した（表6-1, 2, 3, 4）。

保健体育の授業を情報源として選択した学生は全体の6割を越えるが、特に学年別において、1から3学年までが7割近くがこれを選択しているのに対して、4年次では4割強に留まっている。この結果から判断すると、ここ2, 3年は、高校の保健体育授業においてアンチ・ドーピングや薬物乱用など、ドーピング問題に関連する授業が展開されていると推察される。次に、「運動部活動」「競技、協会関係セミナー」を情報源として選択した学生は2割程度であるが、個人種目と団体種目とに大きな差異が認められた。個人種目が34.2%と38.8%であるの対して、団体種目は15.6%と11.4%を示している。これは、個人種目の運動部指導者および競技団体関係者が、アンチ・ドーピング教育、啓蒙を積極的に行っている反面、団体種目については、個人種目よりも1/2もしくは1/3のポイントに留まっていることから、ドーピング防止活動の低調、消極性が伺われる。

2．現状のアンチ・ドーピング運動を踏まえた今後の課題

周知のごとく、アンチ・ドーピング運動は単なるスポーツ界での約束事（ルール）を超え、社会運動として取り組まれている。その象徴が国際条

約の採択である。

スポーツにおけるアンチ・ドーピングに関する国際条約（アンチ・ドーピング条約）は、パリにおいて開催中の第33回ユネスコ総会において2005年10月19日に採択された。この条約は、アンチ・ドーピング分野における初めての世界的規模の政府間合意である。ドーピングは競技者の健康（副作用）、フェアプレーへの違背、不正行為およびスポーツ文化への冒涜であることから、この条約は、ドーピング撲滅を目指して、世界アンチ・ドーピング機構（WADA）を中心とした国内外レベルの協力活動を推進・強化する体制の確立を目的としている。最近の報道では、2005年の採択から3年後の2008年11月13日には100カ国が批准したとされている。

このような世界規模での官民一体となったアンチ・ドーピング運動が展開されているとは言え、ドーピングの完全撲滅とは行かない現実がある。この条約の採択前の2004年開催のアテネ五輪におけるドーピング違反者が26件であったことを踏まえて、国際条約の採択を含む世界中でのアンチ・ドーピング運動が展開されたにも関わらず、2008年の北京五輪は当初1桁の違反かのように報道されつつも、2008年11月にはIOCジャック・ロゲ会長が15件となる見通しを公表している。こうした現状を踏まえると、俗に言う、ドーピングをめぐる「いたちごっこ」は未来永劫にまで続くのではないかと懸念される。

毎年9月末になると、世界アンチ・ドーピング機構から、翌年1月1日から発効する規程が発表される。2008年9月にも幾多の改訂が発表された。その一つに、「居場所情報義務の強化」がある。それは居場所情報提供の方法の変更、つまり「1時間枠の導入」である。これにより、当該選手は、四半期（3ヶ月間）すべての日に対して滞在先を指定し、なおかつ毎日6時から23時の間に検査に対応可能な1時間枠を指定する。この枠は競技会外検査、抜き打ち検査のための1時間である。勿論、居場所変更は認められているが、この規程が検査強化であることは間違いない。四六時中、監視体制に当該選手は置かれている。選手の人権問題の議論は別原稿に譲るべきではあるが、単なる検査強化、罰則強化が行われても、ルール無知だけではなく、「ルール遵守」を無視する価値観が存在する限り、ドーピングはなくならない。

また、日本の現状を日本アンチ・ドーピング機構の発表（日本ドーピング防止規律パネル決定報告）から読み解くと、2008年は、陸上競技（資格停止3ヶ月）、ボディビル（2年）、相撲（3ヶ月）、自転車競技（1年）、ボディビル（2年）、競技ダンス2件（各3ヶ月）、ボディビル（2年）の合計8件の違反がある。ボディビルの3件、資格停止2年間を除けば、いずれも資格停止期間が短縮されている。この短縮から判断すると、競技力向上を目的とした確信犯的なドーピングとは断定できない無意図的、無知による違反であることが分かる。厳格責任（競技力向上を意図していたか否かは問題にならず、体内に存在していたことの責任）を原則とするドーピングの罰則規定からすれば、我が国においては正しい情報を提供して、知らなかったという無知によるドーピング違反が生じないようなサポート体制を早急に整備する必要がある。不断のアンチ・ドーピング教育・啓蒙活動が、特に体育・スポーツ系大学生には欠かせない。無知による資格停止は、競技生活のみならず学生生活上、大きなマイナスになることは間違いない。

これまでの2回の調査結果を踏まえ、体育専門学群においては2008年度より「アンチ・ドーピング論」の授業をスポーツ・コーチング専攻の専門科目として開設した。ここでのドーピング問題をめぐる国内、国際情勢ならびにドーピング検査の実際などの講義が、今後のアンチ・ドーピングの意識向上の一助となることを期待している。また、ドーピング問題をめぐる国内外の状況を適格に把握しつつ、さらなる筑波大学体育専門学群のアンチ・ドーピング運動が具体的に展開、推進されていくことの重要性を指摘して稿を閉じる。

参考資料

- 近藤良享，長谷川悦示：筑波大学体育専門学群生のドーピング意識調査結果（2004年度）筑波大学体育科学系紀要，28：191-198．2005.
- 近藤良享，長谷川悦示：筑波大学体育専門学群生のドーピング意識調査結果（2006年度）筑波大学体育科学系紀要，30：179-184．2007.
- 近藤良享：薬物ドーピング防止教育プログラムの開発と啓蒙、平成14年度～16年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2）研究成果報告書，pp.1-134, 2005.

・近藤良享：なぜドーピングは禁止されるのか. JADA Anti-Doping Guide Book (2007)，日本アンチドーピング機構，2-3頁，2007.
・KondoY: The Japanese Debate Surrounding the Dopoing Ban: The Application of the Harm Principle. (Eds) AngelaJS & FanH. Doping in Sport; Global Ethical Issues. Routledge, 121-137, 2007.
・近藤良享：「ドーピング問題を考える」総括，JOAタイムズ，第31号，3-5，2008.
・近藤良享：遺伝子ドーピングの問題性～進歩主義思想の転換期，日本スポーツ教育学会第28回大会，奈良，2008.